

嫁の反乱

東京中心主義日本ではあるが、私の場合も親類は東京に集中しているので、上京の折は、公私の用事を束のように抱えていく。

ある親戚訪問も今度の上京の一つの仕事であった。訪ねるその日は、その家の一人息子が長い外国勤務を終えて帰宅するおめでたい日である。しかし、当の息子一家の姿はそこになかった。老母から事のいきさつを聞かされて、私は啞然とするばかりであった。

息子の妻、つまり嫁は出産のため一年も前から帰国し実家に戻っている。息子の帰国日を嫁は一日ずらして夫の両親に知らせ、すでに前日に社宅へ引っ越していたのである。実家の親たちと謀り、空港帰着の夫を強引に巻き込んだの別居のための騙し討ちであった。

息子は大手商社のエリート社員で、私が見ても優良青年である。老母の最高の誇りであるだけに、打撃は深刻である。騙し討ちに母心はいま迷いに迷っている。「気の

優しい息子がかわいそう」ともいう。

それだけに抑えようとしても、怒りは心内で燃えているようだ。老母にとつての諸悪の根源は、おそらくあの嫁であるだろう。「二人の結婚に私は初めは反対だったが、結婚すると決まってからはずべて水に流しているのに」と姑はいう。

だれが見てもこの非道な反乱を嫁がしなければならなかった理由を、姑は思い当たらないようである。しかし、理由のない反乱はない。姑は母の立場で水に流したつもりでも、嫁には流れ去らないものが残っているのである。「近いうちに息子夫婦ととくと話し合う」と姑はいつていた。

話さねばならない。教えるように。聡明な子でも、親に対してはいつまでも子であり続けようとする。だから、親の心も立場もわからない。親がわが子にどんなに氣を使っているかも知らないのだ。

(一九八一年二月二十五日)